

「北船場」の町割と町家の変遷について

——特に江戸時代から今日まで——

辻野増枝, 青木洋子, 白木小三郎

The Changing Process of Town-houses and Land Subdivisions at Kita-Senba in the Centre of Osaka

MASUE TSUJINO, YŌKO AOKI AND KOSABURŌ SHIRAKI

1. はじめに

近世の大坂の原型は、石山御坊を中心にした、寺内町であった。この石山御坊は、明応五年(1496)「虎狼のすみか也 家の一つもなく 畠ばかりなりし所」(実悟『拾藤記』)「攝州東成区生玉の庄内大坂」(蓮如『消息』)の地に建立されたのである。当時の町は六町の親町と四町の枝町から出来ていて、永禄七年(1564)の火災ではこの寺内町の町屋900軒が焼失したとある。その後、元亀元年(1570)から天正八年まで11年もつづいた石山合戦の結果、この地は、織田、豊臣と承継されてくるのである。賤ヶ岳の戦いの直後、石山御坊の跡地に築城が始められるとともに、城下町としての大坂の町づくりが急速に進められ、僅々40日間に7000軒の家が建てられたと伝えられている。当初の市街地は堺との接続を期して南の方にのびたが、当時、大坂の圏外であった東横堀川以西の船場、下船場の地域にも町屋の展開が見られた。東横堀川は、おそらく、慶長三年(1597)までに開鑿されていたのであろう。道修町、平野町、淡路町、瓦町、安土町、本町など現在の町名の多くが当時の記録に見られる。これらの町と町屋だけではなく、順慶町(筒井順慶氏)、竜造寺町(竜造寺氏)、玉造(細川氏)、前田氏、鍋島氏、浅野氏、蜂須賀氏)、天満(黒田氏)、備前島(宇喜多氏、石田氏)、今宮(伊達氏)などには諸大名の館が建てられ、ついで、蔵屋敷も建てられるようになった。こうして、慶長の末年にはドン・ロドリゴの「日本見聞記」に見られるように、人口20万にもなった大坂も、元和元年(1615)の夏の陣の戦火で、灰燼に帰するのである。その後、この大坂の町の復興を使命として、亀山五万石の領主・松平忠明が摂津河内十萬石の領主となって廃墟の大坂城に入った。彼は旧三の丸を壊平して市街地とし、四散した町人の還住や伏見などからの集団移住を計るなど、大坂の新しい町づくりに努力

した。幕府は、大坂の復興が軌道にのった元和五年に、松平忠明を十二万石の大和郡山に移封して大坂を直轄地とし、大坂城の再建に着手するとともに市街地の再開発を進めた。大坂城の再建は寛永六年(1629)に完成するが、その間10年、市街地も当初の二倍を越す広大なものになってきた。その後、寛永十一年には上洛中の三代將軍家光が来坂し、永世にわたる地子銀の免除という破格の厚恩を与えた。これは豊臣三十年の恩顧を徳川方に転向さすための計らいであったが、町人の喜びは「仁政の鐘」となって永く鳴りつづけた。幕府のこのような対策もあって、次第に、大坂は町人の町として発展し、寛文五年(1665)には26万、元禄期には35万の人口を擁する大都市になった。江戸時代を通じて、30万から40万の町人に対して、平素、接する武士といえは僅かに東西の両町奉行に所属する60人の与力と100人ばかりの同心だけであった。住民の半数が武士といわれた江戸に比して、大坂が町人の町といわれる所以は、この他に、北、南、天満の大坂三郷の下部行政は各組各町の入札による惣年寄、町年寄による自治制にもあった。

大坂町人の実力の背景は、勿論、その経済力であったが、それも実は封建体制そのものを寄りどころにしたもので、初期の門閥的特権商人はもとより、元禄以降の近世的町人層といえども大差はなかった。商家の家訓に「公儀の法度は堅く守るべし」と教えているのは、当時の商人は体制との密接な関係を保ちつつ、致富の道を進んだことを物語っている。代表的な豪商に大名貸などをした両替商があったが、正徳期には、大坂に483人もおったという。この大名貸で代表される大坂商人と諸藩との関係、特に、その密接な関係は山片蟠桃(小右エ門)が番頭をしていた升屋などの記録にも見られる。このような豪商富商は勿論、自分の家屋敷を持つものを一人前の町人といっていたが、借家人(店借)は一人前の町人としての権利

義務はなかった。大坂の住民のうち、四割が町人層で、借家人層は六割を占めていた。天保年間の町家について、大坂で生まれ育ち、中年から江戸に居を移した喜田川季荘の「守貞漫稿」に、大坂の例を江戸と対比して記している。先づ、町屋の屋根や外壁について「京坂は表の屋根と庇の間は垂木窓子をも全く塗籠にす 唯 庇上にはばき板を顕すのみ 庇下を塗籠る家 更に 無之 又 家宅の外 江戸の如く下見板を打たず 全壁を顕し……」とある。又、「京坂は皆必ず二階造にて 江戸に云 中二階及び平屋など無之……」とあり、今日も見られる古い町屋の外観と異なるところがない。その規模については、表の間口で区分し、四、五間ものを中戸、六間以上を巨戸、三間以下を小戸と呼んでいる。「巨戸は表と裏と二棟に建る也 表は全く二階あり 奥の棟は 表の方二階 座敷上は鍛にて二階無之也」とあり、京都などで「表屋造」と呼びならわされてきた形式そのままの家構といえる。表屋といわれる表の棟は「見世」(店)で二階建、その二階部分は店員の部屋が物置になっている。奥の棟は主屋で家族の住居、通庭(土間)に近い下手は二階屋になっているが、上手の座敷部分は平屋で前後に鍛庇がついている。表屋の見世庭は、主屋との間の、露路庭につづき、更に、奥の主屋の高く吹抜けになった通庭につづく。主屋の上手の座敷部分の表側と裏側には「先栽」(露地庭)が開け、表側の先栽は外の通りとの境は堀で仕切られ、裏側の先栽の奥、屋敷境には土蔵が建っている。表口が四、五間の中戸の規模の場合は巨戸の例のような表屋造の二棟式の家構と見世の部分と住居の部分が一棟になった二階屋の家構との両方が見られる。その外観について、これも「守貞漫稿」に、次のように記している。「生業により惣格子 或は 半ば揚見世 半ば格子にする也 毎戸如此と云うに非ずと雖ども 大略 大同小異のみ 江戸の如く 毎戸其制を甚だ異にするもの稀也」。このように同じような家並が出来たようになった背景は「翁草」の一節にも見られる。これは享保年間の「妙知焼」と呼ばれた大火の後の復興の様態を記したもので、「大坂の人は家を焼るや否、前後を不顧 いかにもして我一と家を造る。もし其力なき人は地を沽却して所を立退く 何れも町を荒すは大坂の恥なりとおもふ 灑然たる性質なり……」とある。このように、自らの家作とその町並には深い関心と高い自負心を持ち、その町の家並を乱すことを町人の大きな恥と心得ていたのである。しかし、商家としては、表の間口が限られている以上、見世の部分の拡大するために、表側に「おだれ」(庇)を出す傾向が強くなってくるのは当然といえよう。江戸初期の寛文年間の「触」にも「大道に家を建出候儀 可為曲事(中略)家のおだれに壁を付 本

宅へ仕込申間敷事」とある。その後も、再再、おだれを出して大道の幅を狭めないように、同じような「達」がみだれられている。それだけに、「ねじがね屋敷」と呼ばれ、本屋の軒下から捻じた帯鉄で庇を吊り上げ、下の往来に支障のないように考えた今橋二丁目の紙屋治兵衛家は家並の模範となってきた。もともと、船場の物資の流通は東西の横堀川によっていたので、その街路は、城下町という性格からも、東西の「通」が四間半、南北の「筋」が三間半の狭いものになっていた。したがって、明治維新後の新しい社会経済環境、特に、明治9年の梅田ステーションの開設による新しい交通条件には対応できなくなってきた。ついに、大正の初期から、路面電車の工事と平行して、街路の拡幅が推進され、そのために、町屋の「軒切」が実施されるに至った。明治以前の「株」組織を背景とした同業同職の町から自由経済体制の商工業の都市構造に変貌しつつあった。このような推勢は、この軒切を契機にして加速され、今日見られるような多様な変化が家構とその家並に現われてきたのである。すなわち、商売が出来なくなって「仕舞屋」になった町屋、営業のために家族の居住部分まで使用するようになって「職住分離」した商店、更に、経営拡大にともなってビル化してきた商社。このような推移の下に多様化した建物が街道をはさんで建っているのが、今日の大阪、特に、もとは同じ構えの町屋が軒を連ねていた船場などの姿である。

2. 「北船場」の町割の推移

「船場」というのは、大川から長堀川までの東西両横堀川にはさまれた地域の総称である。江戸時代は、全国諸藩の中央市場の役割を果たしてきた。現在でも商都の伝統は受けつがれており、大阪の心臓部である。この「船場」地域は、明確な区分ではないが、通常二つに分けられて、本町より以北が「北船場」、以南が「南船場」と称されている。本稿では、旧い町割・町家などを多く残している「北船場」を特にとりあげ、町割及び町家の推移について考察をおこなった。本章で町割、次章で町家についてみてみたい。

1章で、述べたように、「船場」は、秀吉の後を受け継いで、徳川幕府によって整理・再開発されたのである。すなわち、秀吉が砂州を開拓して町割したものを基に、大坂冬・夏の陣の後、松平忠明が復興・計画したものが原型となっている。

江戸時代に刊行された大坂の町割図の数は多く、明暦の古図以降、百種近くも板行されている¹⁾。これらの古図より、当時の街区の様相が推察できる。ここでは、(表1-1)に掲げた9種の古図と、明治19年の内務省地理局図籍

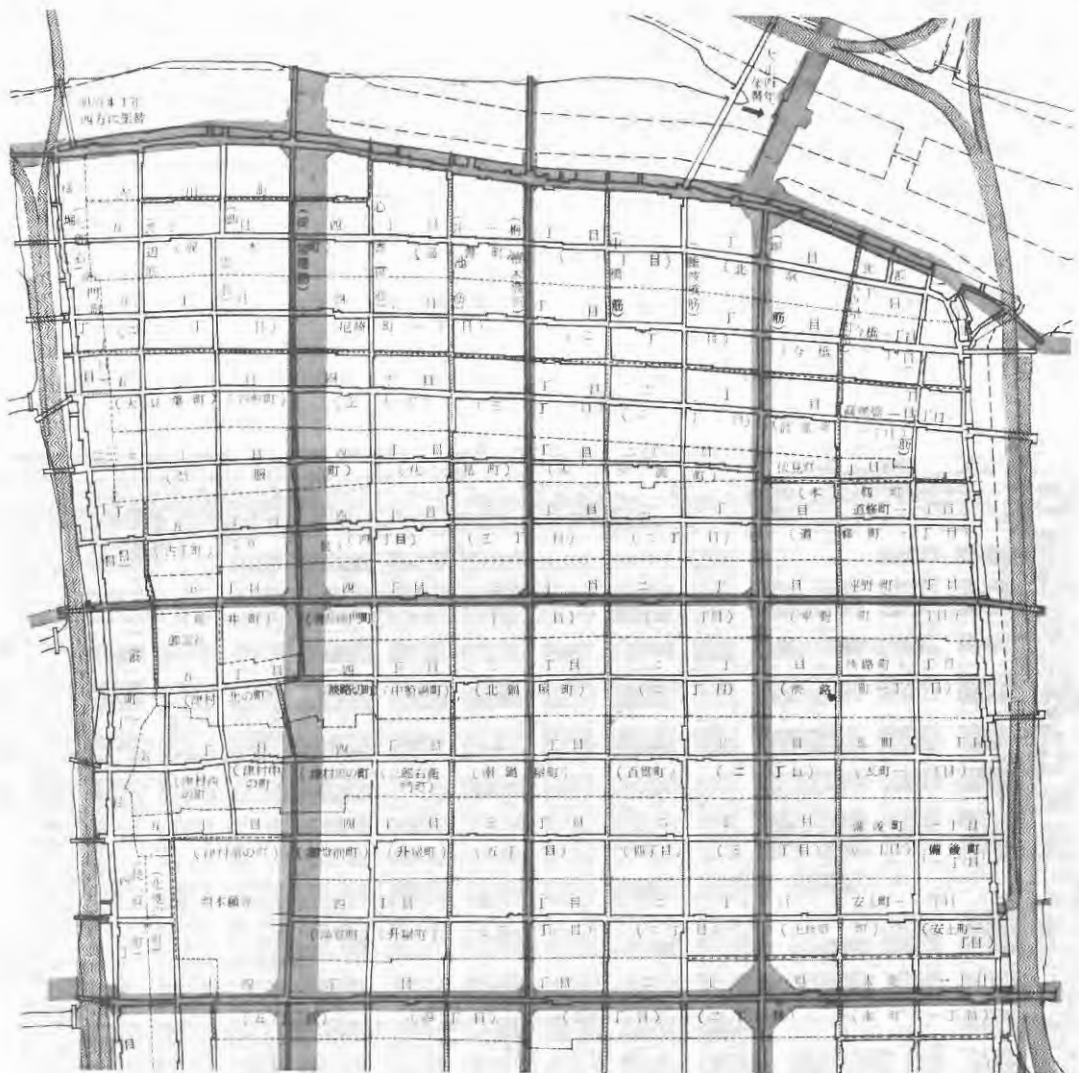
課による実測図、及び昭和49年の大阪市総合計画局作成の地形図を資料とした。明治の実測図と江戸時代のそれぞれの古図を照合してみると、町割に大きな相違はみられないので、この上に、地形図を重ねて江戸時代から現在までの推移をたどってみたのが、(図-1)である。

主な変動をあげれば

- (1)市電軌道敷設及び都市計画事業による道路の拡巾(外北浜通、平野町通、本町通、堺町筋、梅檀木橋筋、御堂筋)
- (2)橋の架替(肥後橋、難波橋)
- (3)高速道路の架設(東・西横堀川上)

表-1 地図一覧表

年代	西暦	地 図 名
明暦三年	1657	新坂大坂之図
貞享四年	1687	新撰増補大坂大絵図
元禄四年	1691	新撰増補大坂大総図
宝暦九年	1759	摂州大坂面図
明和二年	1765	増補大坂図
天明七年	1787	増補大坂図
文化十年	1831	増修改正摂州大阪地図
弘化二年	1845	弘化新改摂州大阪全図
文久三年	1863	改正増補国宝大阪全図
明治19年	1886	大阪実測図(内務省地理院図籍課) 1:5000
昭和49年	1974	地形図(大阪市総合計画局) 1:2500



(〰〰〰〰〰〰 高速道路 〰〰〰〰〰〰 変動の大きいもの)

図-1 「北船場」の町割の推移

(4)堀の埋立(西横堀川)

であるが、小規模な「軒切」は各所で行なわれた。

「北船場」の町割は、一部の不整形な所を除いては碁盤状をなしており、東西・南北およそ40間四方の地割を基本型としている。そして、その中央に巾3尺～5尺の溝を東西に設け、雑用水の放水路にするとともに、町の境界にもなっていた。すなわち一丁目の範囲は、東西の道路を中心として、その南北各々20間である。中には、淀屋小路・浮世小路・絹張小路のように、この半分の奥行10間のところもある。「北船場」の東西の「通」は合計12、南北の「筋」は13ある。「通」が重視され、大商家は、「通」に面し、「筋」を表とすることは、ほとんどなかった。

次に町丁目の移り変わりについて述べたい。(図-1)に現在の町名と江戸時代のものを並べて記入してあるので参照されたい。明暦三年(1657)の古図(図-2)によると、南北の「筋」毎に丁目が変り、東横堀から西横堀までそれぞれ通しで十二丁目までであった。それが貞享四年(1687)以降の古図では、明暦の整然とした通し丁目が崩れてくる。2～3ブロックが合わされて一つの丁目となり、その結果、「通」によって異なるが、四・五丁目位までと丁目数が減少している。それとともに、西の方では個々の町名も見られる。

明治に入って、5年に大巾な町名改称がおこなわれ、

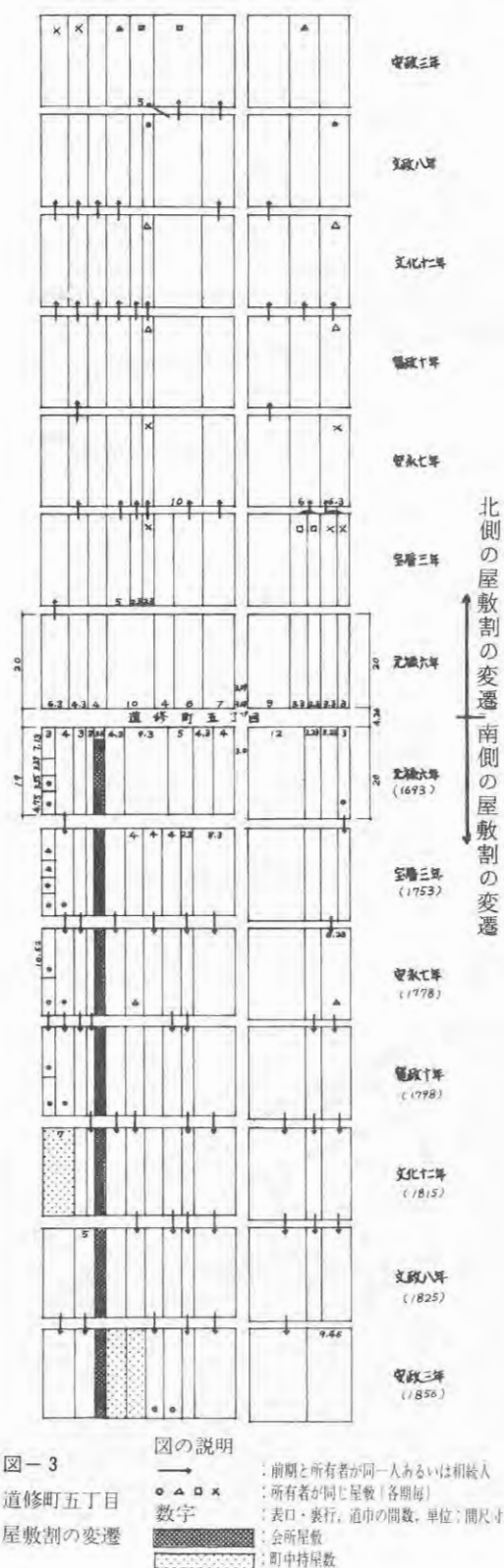
五丁目まで(安土町・本町は四丁目)の通し丁目になって現在に及んでいる。

以上のように「北船場」の町割は、基本的には大きく変動していない。それに比べて、屋敷割の方は、所によってかなり変化しており、家並にも影響を与えている。「船場」の屋敷割は、表口約5間をその平均型とし、それ以下になると狭隘で、問屋としての機能に支障をきたしたといわれている。それ故、問屋層などの町並では大体1ブロックを東西に八等分した5間の表口が標準になったと考えられる。この屋敷割の推移について、道修町五丁目を取りあげて考察してみたい。この町は、他町に比べて水帳の史料が多く残っていて、元禄・宝暦・安永・寛政・文化・文政・安政各期のものがある。(図-3)は各期の水帳によって作成した屋敷割図で、その変遷を図示したものである²⁾。所有権の移動はかなり頻繁であるが、元禄から宝暦期を除き、屋敷地の細分化は全くみられず、逆に拡大化の傾向があり、全屋敷数は減少している。また、(表-2)は規模別の屋敷数の変化をまとめたものである。6～10間の表口の階層の増加という現象が顕著である。

しかし、明治に入ると、(図-4)のように相当な細分が進み、特に「筋」に面した屋敷割の細分が目立ってくる。これに対して、同時期の道修町三丁目の屋敷割(図-4)



図-2 明暦三年(1657)「新板大坂」之図



では、二屋敷が一屋敷になった一例がみられるだけで、大きな変化はみとめられない。五丁目が仕舞屋化、小売商店化していくという傾向と三丁目が問屋街としての性格を保ち続けるという傾向が読みとれるのである³⁾。

明治44年の地籍図、昭和11年の建物用途別現況図、昭和49年の地形図の三種の地図より、各期の「北船場」の屋敷割を全体的にみることができ。概して言えば、上記のような傾向は、他町についてもほぼ同様にみられる。すなわち、中戸・巨戸の規模のものは、各「通」の一〜三丁目あたりに多く、四・五丁目では細分化が顕著になっているほか、「筋」に面した屋敷割も一〜三丁目に比べて多い。しかし、北部の北浜・今橋・高麗橋では一〜五丁目を通して、あまり差のない屋敷割となっている。

また、大阪駅が梅田に建設された事、堺筋の市電軌道敷設に伴う12間巾への拉巾、御堂筋の24間巾の幹線道路建設に続く地下鉄の開通などによって、南北の交通体系が整備されるとともに、「筋」に店舗が並ぶ傾向が強くなった。現在では、それに益々拍車がかかり、かなり屋敷割にも大きな変貌がみられるようになった。しかし、平野

表-2 規模別屋敷数

点口	間	2-3	3-4	4-5	5-6	6-7	7-8	8-9	9-10	10-
元禄	3		7	7	2	1	1	0	2	2
宝暦	6		7	8	1	2	1	1	1	1
安永	5		2	7	1	4	1	1	1	2
寛政	5		2	7	1	4	1	1	1	2
文化	5		2	6	1	5	1	1	1	2
文政	4		1	6	2	4	2	1	1	2
安政	2		0	6	3	3	2	1	2	2

(裏行が19間以下あるいは「筋」に面した屋敷に除いた。)

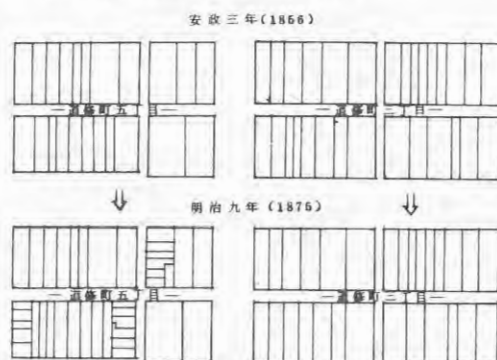


図-4 安政三年と明治九年の
道修町五丁目と道修町三丁目の屋敷割図



図-5 北浜、今橋、高麗橋一・二・三丁目屋敷割の変遷



図-6 平野町、淡路町、瓦町、備後町、本町四・五丁目、
横堀三・四丁目屋敷割の変遷

町以北では、第二次大戦の戦禍をうけなかったこともあって、幹線道路からはずれた地区には、昔ながらの屋敷割の古い町屋の残存が処々にみられる。⁴⁾

(図-5)及び(図-6)は、以上の概要を補足する意味で、「北船場」の東北と西南の部分を取り出し、各期の屋敷割を、より細かく具体的にみるとともに、地区による差異をみてみたものである。

前者は、北浜・今橋・高麗橋一・二・三丁目の部分である。各期ともかなり整然とした屋敷割であり、巨戸の屋敷構も処々にみられる。両替商や問屋などの豪商が軒を並べた様相がしのばれる。現況では、金融機関や商社の大規模なビルが多くなってきている。

後者は、平野町・淡路町・瓦町・備後町・本町四・五丁目、横堀三・四丁目の部分である。前の地区に比して各期を通じて、狭少な屋敷割が目立っており、町の境界線も歪曲している所もある。もと、この辺りは津村と称する集落であり、また、御霊さん、西本願寺を中心とする門前町であったことなどから、「北船場」でもかなり性格を異にした地区として引き継いでいる。しかし、この地区でも、現況では、御堂筋に面して巨大なビルが、連続して立ち並んでいる。

幹線道路沿いのビル化に伴う変動を除いては、この二地区の屋敷割は、「北船場」のうちでも対称的な様相を呈しているといえる。

3. 「北船場」の町家の推移

1章でふれた「守貞漫稿」には、巨戸・中戸として(図-7)のような典型的な町屋の例が記載されている。ともに「商」の為の空間と家族の居住空間の二つの機能を含むものであるが、表口の大小は、「商」の規模の大小や使用人の多少にもつながっている。巨戸の方は、機能が空間の性格区分となって、はっきりと棟を別にしていて、どちらにしても、表通に近い「表屋」から店舗及び使用人の部屋、家族の住居と並ぶ間取形式であり、「町屋」の重点がやはり「商」にあったことを示すものであろう。江戸時代は、町人の町であった大坂といえども、町人に対しての生活規制は厳しく、町屋の規模や造作に対しても同様であった。特に、江戸中期以降は町人層の経済力が伸張り、規制に反して、家屋内部の造作も一層華美なものとなってきたようである。何度か「触」が出され、細部にわたっての規制がなされていることは、造作に凝る傾向が如何に一般的なものになろうとしていたかを物語っている。

このように経済力を誇った大坂ではあったが、幕末から明治にかけての社会構造の変化には大きく揺れ動いた。「天下の台所」と称されたように、「船場」が江戸時代の封

建社会で経済的な面で果してきた役割が大であっただけに、明治以降の社会変化が、直接船場に居住する住民の生活、ひいては町屋にも大きな影響を与えているといえる。近年ビル化の進んだ町とはいえ、幹線道路からはずれたところには未だ木造の町屋が残存している。これらの町屋を「住い方」の型で分類すると、次に掲げる三つに大別できる。それぞれの調査例を通して、具体的に町家の推移の状態を考察してみたい。

(1) 「職住一致」の住い方をしている場合

①小西利七家 (図-8)

瓦町一丁目に表口3.25間奥行21間の屋敷を有し、業種業を営んでいるが、「表屋」造で全体的に改造の少ない町屋である。以前は住み込みの使用人も多く、男は「表屋」の二階、女中は一階の「なかのま」に就寝し、店の支配は「表屋」で、内向きの支配は奥の「座敷」という典型的な使われ方であった。現在は従業員も全て通勤となり、一階の座敷と二階の部屋が家族の就寝空間として使用されている。敷地奥の土蔵に商品が納められているので、通庭はそのまま残されているが、「見世」の床が落とされ、表の大戸は取り除かれてシャッターに変わるなど、商売上の近代化による影響を余儀なくされている。

②北垣薬品 (図-9)

道修町三丁目井池筋南西角に位置し、表口5.5間奥行14間の屋敷である。宝暦十三年(1763)に初代北垣清兵衛氏が、商売の先行に困った場合を考慮して、借屋との二軒屋として建てたものであり、六代にわたり薬種商を営んでいる。「軒切」以前の姿を示す古図によると、間取は典型的な通庭一列並び四間取型であるが「通」に近い六帖2室は「見世」及び10人程の使用人の就寝空間として、次の六帖は食事の場で、御寮人さんが女中をはじめ全ての使用人を指図する部屋として使われていたという。現在では「見世」部分の床が落とされ事務所となっている他、隣の借屋を改造し、一階はガレージや商品置場など商売用に、二階は子供室として家族用に使用している。「職」と「住」を一体にしているとはいえ、従来に比べると、部屋の使用の面で、二つの機能が明確に分離されているのが目立つ。

③圓井家 (図-10)

表口5間、奥行約9間の敷地に建つ、本二階造の町屋である。もとは旅館であったため、廊下が巧みに配され通り抜けを要する室が無い。現在は古美術商を営んでいるが、「見世」及びもとの「先裁」と「座敷」が商売の為の空間になっている。「見世」の床が落とされ、出格子はショーウィンドウに改造されているが、土壁腰

板貼の高堀や竹の犬矢来などと良く調和のとれたファサードを構成している。商売の性質からくるものであろう。就寝空間には二階が設けられているが、旅館としての間取りが、現在の個室を求める住生活の傾向にうまく対応している。

以上は「職」と「住」の二つの機能を現在も併せもつ町家の例であり、町家本来の住い方を踏襲しているといえる。小西利七家や北垣薬品のように、関西が中心的役割をもってきた薬種商の場合は、船場で商売をすることが一つの信用という武器になっている。薬種業の中でも近世以来格を誇った、道修町、平野町などには、武田・田辺・塩野義のような大資本は勿論のこと、より小規模な商店（中小企業・家内産業やブローカーのようなものなど）までも集中している。大資本を誇る店は、当然ながら、表口の広い敷地を持ち、いち早くビル化しているのであるが、中小資本の店になると、敷地面積から考慮しても、さほどビル化する余地はなく、経済的ゆとりもないまま、従来の古い形式の町屋を使用している場合も少なくない。

内部の生活を見ると、一般に、以前は商売の機能が、かなり町屋の奥にまで浸触し、家族の日常生活と混同していたが、最近でははっきりと区別される傾向が目立っている。極端になると、(図-11)のように、居住者はいるが、「見世の間」だけを貸事務所として使っている場合も出てくるのである。多くの使用人を御寮人さんが管理していた頃ならば、使用人も一体となって同じ屋根の下に居住する意味も大きかったであろうが、近年では、私生活はむしろ切り離す雇用関係となり、使用人の生活空間としての意味は、町屋の機能から失われてしまっている。

また、家族がどの位の部屋を使っているかを見ても、個室を与える傾向が著しい今日、機能の失われた使用人の居住部分が転化されている例も多い。しかし、家族の占有する部分は広がっても、居住性が良くなっているとはいえない。プライバシーの無い間取り形式、敷地の奥に位置する関係からの日照不足、陰うつな雰囲気、子供の遊び場の不足……など、住み手の口からもれる不満は多い。町家としての価値を認めた上での居住とはいえない場合も多く、積極的により良い住い方を追求しようという姿勢は感じられないのである。遅かれ早かれ住居としての機能は船場外に求めるか、職住併用のままであっても、耐用年数がきた時点で、建て換えられる方向をとるであろう。

しかし、一方では、圓井家のように、町屋形式が商売上有利として積極的に居住している例も少なくない。現在

する町屋の中でも、古美術商・道具商はいくつか見られるが、商売上の舞台装置としての効果は大であり、手入れ良く大切に使用されている(写真-1)。外観だけを町屋風にデザインした飲食店などと異なり、内部の各部屋は勿論、生活そのものの面から、町家の意義を尊重している例といえる。

(2) 営業専用の建物になっている場合

①塩野香料株式会社 (図-12)

道修町三丁目の表口10間奥行20間の敷地に建つ、「表屋」造の重厚な家構で、西隣の塩野義製薬や斜向いの田辺製薬のビルにひけをとらない落ち着いた様子を見せている。明治末期の建物であるが、大正9年(1920)に「軒切」されたのをはじめ、幾度か改造を重ねた。その度に営業空間が奥の居住空間を浸触してきた。建築された当時の「表屋」は、二階の物置を含めて営業空間として、主屋は、当主の家族及び16人の住み込み従業員の居住空間であった。4つある蔵も、「店」用と「家」用に分けて使われるなど、商売の機能と、家族及び従業員の居住空間としての機能とが、うまく分離されながら、まとめられていた。商売の発展に伴い、西側の借屋は勿論主屋にまでも営業空間が拡大し、現在は主屋の二階に管理人が居住するだけで、全て営業空間になっている。製造から出荷までの作業は工場でなされ、ここは営業事務だけの機能しか持たない為、このような古い形式の建物でも支障がないという。むしろ資金があれば工場の設備費にあてるべし……という船場の老舗ならではの考え方を具体的に示している。

②小西儀助商店 (図-13)

道修町堺筋東北角に位置し、7階建の白い三越百貨店のビルをバックに黒くどっしりとした家構を見せている。明治36年(1903)に建築された「表屋」造の非常に大きな町屋であるが、明治末期に堺筋の拡張に伴って軒切され、改造が加えられた。先代までは、この建物に愛着をもってここに居住していたが、現在は、全く事務所としてしか使用されていない。「見世」部分は床を落とし、間仕切りははずされ広い一室となっている。しかし、主屋の「仏間」や「座敷」は、絨毯敷に面接セットという使用方法ではあるが、昔ながらの雰囲気を残し、格調の高さを印象づけている。堺筋に面した棟の二階は、現在、従業員の茶華道の稽古ぐらいいにしか使用されていないという。

外観や間取り形式は、(1)の場合と同様か、あるいは、それ以上に古い形式を残しているが、町家の機能が変化し、

営業空間だけになっている場合のものである。現在ではむしろ(1)の場合よりも多くなっている。

船場に店を構える意義は、この地域が現在もなお西日本の中心として経済的に重要な役割を果たしている、大阪の中心に位置することにある。営業面からの視点である以上、町家の機能も「商」に重点がおかれ、住居としての性格は失われていくことになった。元来、商売中心で家族の生活もそれに合うような暮らし方がされてきたのであるが、近代的な経営方法に移行するにしたがい、住居としては、全く別に、より良い環境を求めるようになってきた。昭和10年頃には、町屋の構造上、通風採光の面から健康には良くないという人もあり、帝塚山・豊中・阪神間などの郊外へ住居を移し、船場の町屋は全く営業の為の建物となる例が一般的となったのである。

ただし、この場合も、塩野家のように船場商人らしい考え方を基礎に持って町屋を使用している場合ばかりではなく、むしろ経済的な理由でそのままになっている例の方が多い。これらは、「町家」としての生活面より、「船場」という地区的な特性を重視するのであるから、やはり機会があればビル化の方向をたどるであろう。

(3) 専用住居の場合

①辰野家(旧炭彦家) (图一14)

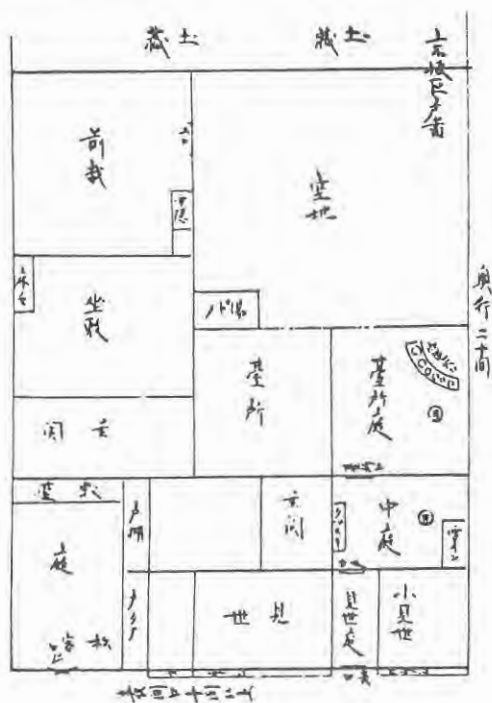


図-7 「守貞漫橋」の巨戸と中戸の図

平野町一丁目に表口13間奥行19間の敷地を有し、かつての「巨戸」らしい家構で、落ち着いた雰囲気をしてのびせる。天保八年(1837)の普請で、もとは十人両替の一人として資力を誇った、炭屋彦五郎の屋敷であった。しかし、明治期の大規模な「軒切」で大改造をせまられ、専用住居に転換せざるを得なかったのである。すなわち、「軒切」により、営業に最も大切な「表屋」部分が、1.5間と梁行の半分近くも削られることとなり、その機能を果せなくなってきたのである。現在では、表屋部分は、「見世



图-8 小西利七家
平面图



(古図)



写真-1 古美術商砂元吉家、外観

北浜5丁目にあり、茶道具を扱うため、内部は、「原叟好み四畳半」「元伯好み二畳台目向切の席」など格式ある茶室をいくつか含んでいる。

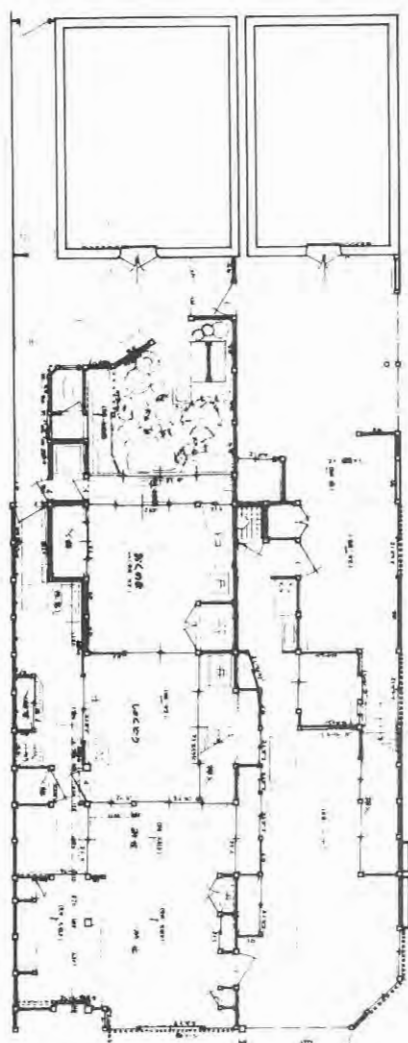


図-9 北垣薬品、古図及び現状平面図

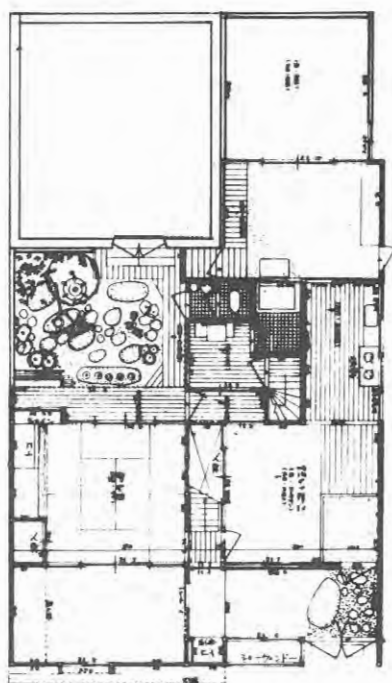


図-10 圓井家、平面図



図-11

前田吉薬品平面図

というよりは、あたかも長屋門のような機能になっている(写真-2)。しかし、十人両替としての力をしのばせる、建物の質の高さは、主屋部分の意匠にもかかわれ、格調高い専用住居として現在も十分に機能している。

(3)に分類されるのは、営業の機能を失い、専用住居になり仕舞屋化した場合である。

家訓というものが見られたように、船場の商人は、その時の力をただ誇るだけでなく、現状を守り確実に次代に伝えてゆくことに力を注いでいた。しかし、それでも経営規模や方法を変化縮少していった店も多かったのであるが、その外的要因として、社会経済構造の変化とは別に、「通や筋の性格の変化」と「軒切」の二つをあげることが出来るのである。特に「軒切」は、町家の命ともいべき「見世」部分を直接浸蝕するものだけに、大きな影響を与えた。巨戸ぐらいの規模があればこそ、「軒切」を契機に専用住居化することも可能であったと思われる。

その他の例として、倉庫的な機能のみの町家も現われている。同じ船場内でも幹線道路からはずれる地区は、交通の便からも、立地条件は営業面で不利となり、商売上の機能が果せなくなっている。その為、営業はより中心にある貸事務所等に移行させた後の、町屋の利用方法の一つである。

4. おわりに

幕末から明治にかけて、政治のみならず経済の中心も東京へ移行することとなり、大阪の経済界は大きく揺れ動いた。しかし、長い間に培われた大阪商人の力は、第二次大戦の危機をものりこえ、西日本の中核として現在もやはり日本経済界で大き

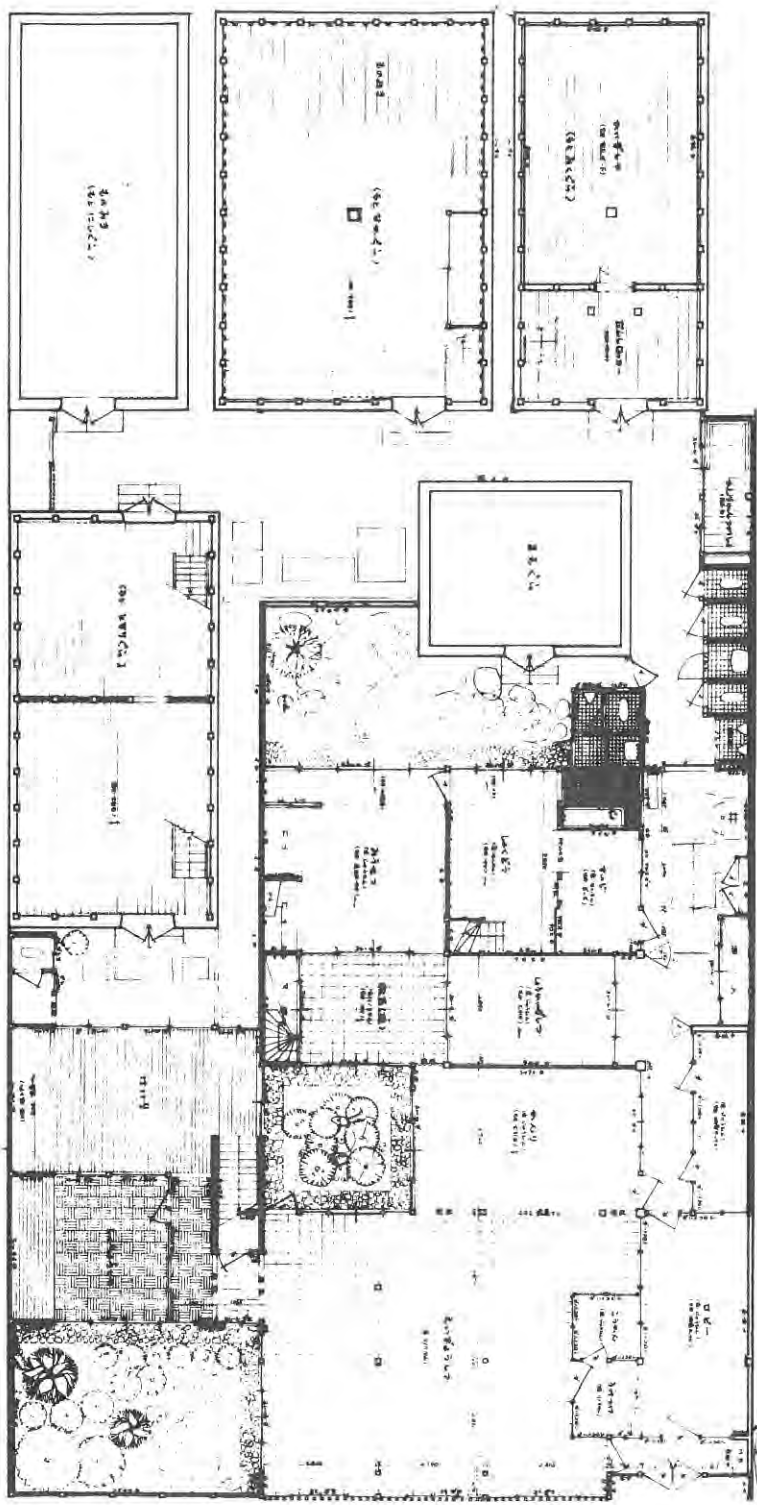


図-12 塩野香料株式会社、平面図

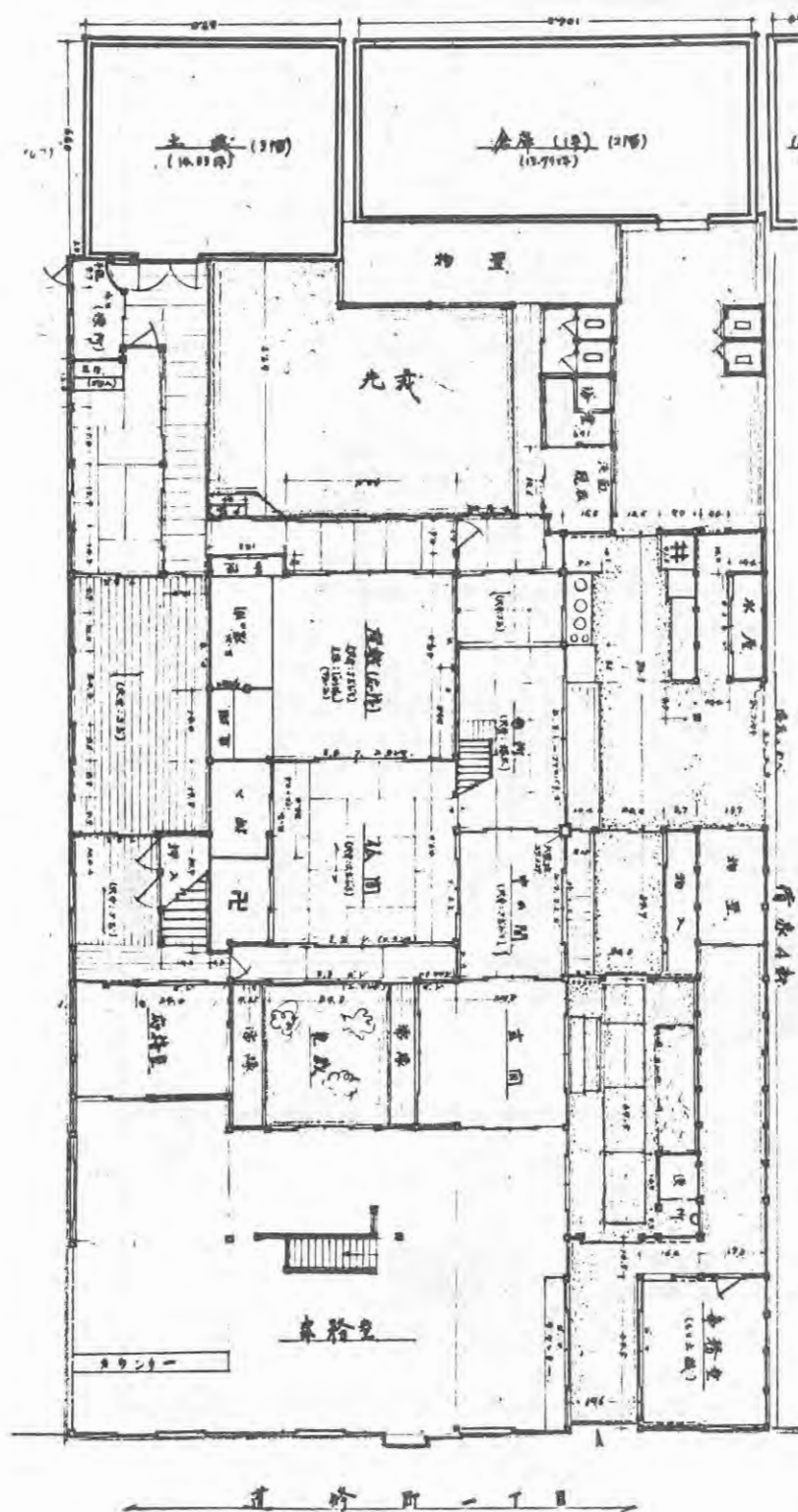


図-13 小西儀助商店、平面図

な役割を果たしている。

「老舗」といわれる会社が船場になお数多く存在しているということは、この船場地区が、長い歴史の伝統を重んじる面を持っていることを示すものであろう。同業同職が集まっていた江戸時代の系譜を引く街区構成が、薬品関係、繊維関係などには、現代にも引きつがれているのである。

「船場」の町割、屋敷割は、基本的には、当初のものを受け継いで現在に至ったものであるが、交通体系や経済機構の変化に伴って、大きく変貌している部分も見うけられる。道路の拡巾、高速高架道路の架設、巨大ビルの建設など、大阪の中心地であるだけに、近代化の波及もより大きく、幹線道路に面する部分は殆んどビル化している。そこでは、旧来の「船場」の面影を伺うことは困難である。

反面、それ以外の地域には、古い町屋がかなり処々に残存している。これらの多くは、表口は「通」に面し、町境までを屋敷とする昔ながらの家構である。

ひと口に「船場の町家」といっても、現在まで存続している意味は様々である。「店舗」と「住居」の二つの機能が有機的に結びついた家構を、「町家」と規定すると、現存する船場の町家の大多数が、「町家」とはいえない状態となっている。「船場」の価値を経済的な立地条件に置くならば、町家に営業上の機能が重視されるのは、自明のことであり、町家の性格の変化は必然的なものといえよう。

現に昭和55年春には、今橋二丁目に権勢を誇り、船場商人の象徴ともいふべき豪商鴻池家の旧屋敷の一部がとりこわれビルに変身することになった。摂津名所図会などにも、堂々たる巨戸の構えが描かれているが、天保八年(1837)の再建後も、また、「軒切」がなされ大阪美術クラブの所有とな

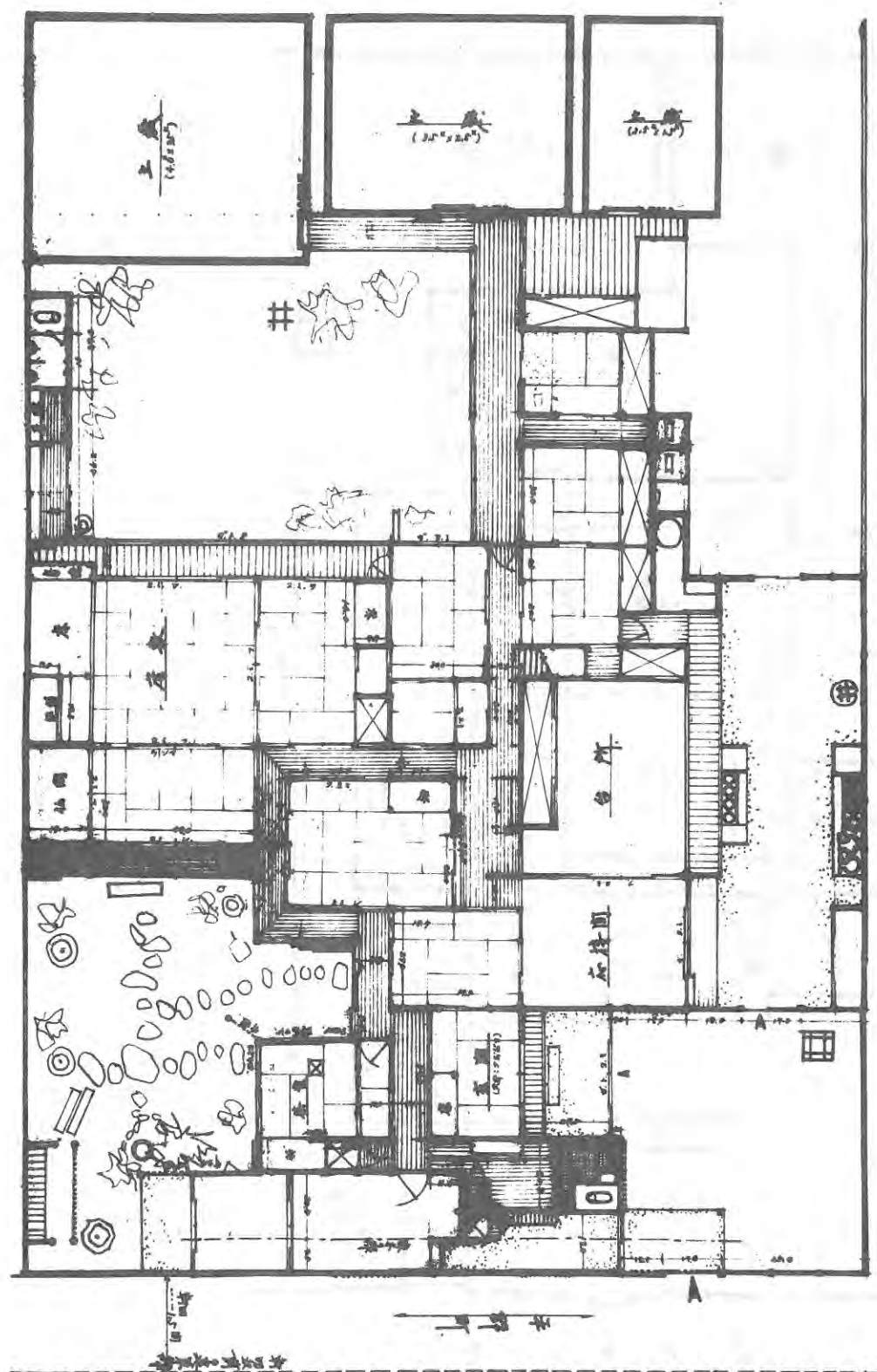


图-14 辰野家(旧岸彦家)平面图

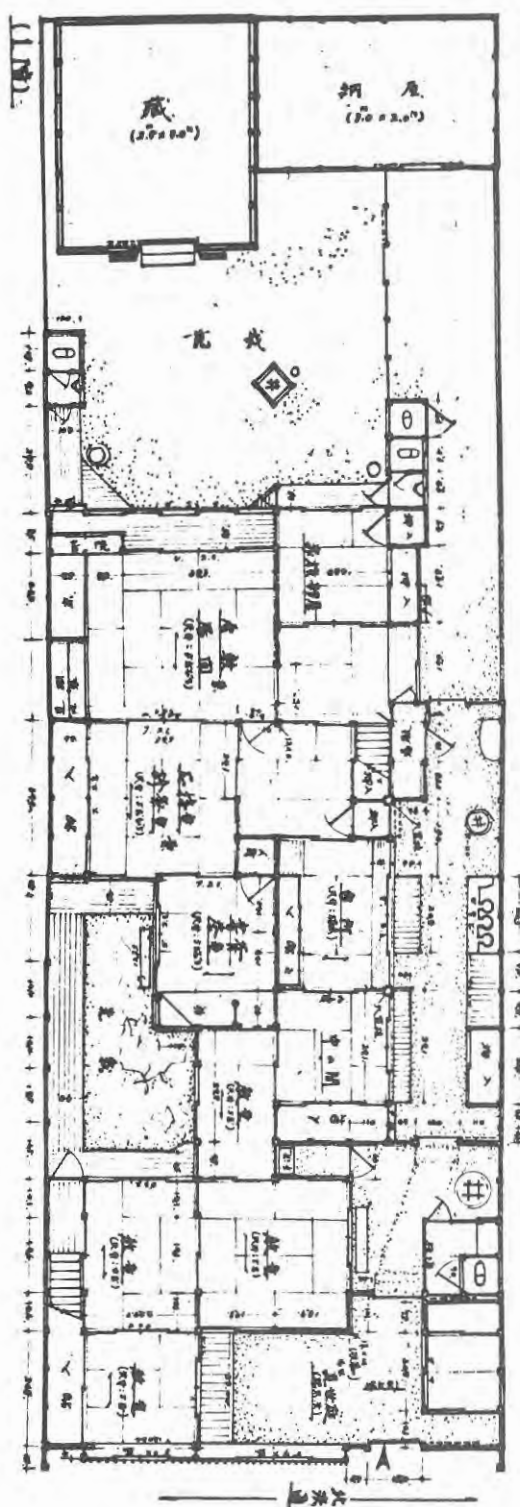


図-15 適塾、平面図



写真-2 辰野家、外観（S43年当時）



写真-3 大阪美術倶楽部（旧鴻池家）
解体前外観

っても、外観の様子は受けつがれていた貴重な町家である（写真-3）。豪商の屋敷にしては、外観も内部も大変質素なものであるが、「表屋」造の部屋数の多い広大な屋敷は、貸席として、美術商の懇談会場や呉服の展示場などに、古い形式を生かした使い方がなされていた。歴史的に由緒ある名家が、船場の中でも格があるといわれる「通」で、「町家」形式を生かして存在していたことは、船場における町家の一つの生き方を示す好例であった。しかし、他の土地で再び生命を与えられるとはいえず、この鴻池の建物が「船場」から消えることは、これからの町家の方向性の一つを象徴しているのではないだろうか。

このように「町家」が変貌してゆく一方では、緒方洪庵ゆかりの適塾が、重要文化財の指定を受け、典型的な江戸時代の町家を後世に伝えるようになったことは非常に意義深い。我国の蘭学の発展に大きく貢献し、幕末から明治にかけて日本の近代化に寄与した、大村益次郎、福

沢論吉をはじめ、多くの門下生が築立った適塾も、町屋としては当時のごく一般的な表屋造の中戸である(図-15)。「表屋」は塾生の生活空間であり、奥の主屋が洪庵及び家族の起居するところであった。昭和51年より解体修理に着手され、55年3月末には、洪庵時代の姿に復した形で完成し、一般公開されている。特筆すべきは、この工事と合わせて、適塾周辺の史跡公園化がはかられたことである⁵⁾。西隣の愛珠幼稚園や、銅座跡、除痘館跡などと連帯した史跡公園は、周辺地域のオアシスとして、豊かな町づくりの一端を担うことを期待されている。

謝 辞

「北船場」の町家を調査するにあたって、井上虎之助氏、藪内吉彦氏に多大のご助力とご教示を頂きました。また多くの方々が、快よく調査に応じて下さいました。そして、卒論学生の西元弘美さん、村田至代子さん、牧野由

利子さん、萬谷光子さんの熱心な協力を得ました。ここに記して、深謝の意を表します。

文 献

- 1) 佐古慶三：大阪，増修改正摂州大阪地図，原田伴彦他編「近畿の市街古図」，鹿島出版会，1978年
- 2) 辻野増枝，青木洋子：「船場」の家屋敷の推移，日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)，1979年
- 3) 白木小三郎，島田多津子：大阪町人の家屋敷の所有状態とその変化—道修町三・五丁目の場合—，日本建築学会近畿支部研究報告集，1969年
- 4) 辻野増枝，青木洋子，西元広美，村田至代子：「船場」の町並 その1—現状，日本建築学会近畿支部研究報告集，1979年
- 5) 適塾記念会編：緒方洪庵と適塾，1980年

(昭和55年11月13日受理)

Summary

This paper aims to follow the changes of "Machi-wari" (land subdivision) and "Machiya" (town-house) at Kita-Senba in Osaka City.

Kita-Senba has a neat grid pattern of streets. The streets lying east and west are called "Tori", and the north-south ones are called "Suji". This pattern was laid out in the early 1600's. Originally each block was 40 ken square, and, as a rule, it was divided into sixteen housing lots. The two halves of the blocks facing the "Tori" between them (the north half of one block and the south half of the opposite block) composed one "Cho". Each "Cho" along the "Tori" was named in an orderly manner (from the first to the twelfth "Chome"). A standard type of the housing lot was 5 ken wide and 20 ken deep. Almost all the houses faced the "Tori", setting up "Mise" (stores or offices) at the front part of the dwelling houses.

From our research we can point out several changes of the "Machi-wari" and "Machiya" as follows.

- 1) The original division of the housing lots and the orderly names of towns became diversified.
- 2) After the Meiji period, this "Machi-wari" confronted a radical change. Streets were widened, canals filled up, and a new express highway laid out.
- 3) With the improvement of the "north-south" traffic system, more and more houses have come to face the "Suji", and along the main streets many of them have been rebuilt into high buildings.
- 4) In many of the remaining "Machiya", the business space has been extended and tends to expel the dwelling space. In this sense the original "Machiya" has been diminishing.